

はなやつで／暖地に自生、庭木としても植えられる。初冬、小さく細かい黄白色の花を鞠状(まりじょう)にたくさんつける。一見地味な花だが天狗の団扇(うちわ)のような葉ともあいまって、力強さも感じることができる。

らしく

自分らしく、
粹なくらし

特集

多方面から子育てをサポート

自宅を開放し子育て支援。母親の居場所づくりと異世代との交流／ソナタのリビング
高齢者による「孫」世代の子育て支援／ゆうやけルーム高陽

未来に向けて芽生え始めた、パパ友交流サークル／Club I am a Father

Hm助成支援団体の紹介／人材バンク名人達人 宝人／ようこそ！公民館へ・西区内公民館
らしくレポート・手押しポンプの不思議／らしくコラム・子育て支援：学生だからこそ出来ること……／情報の森／プラザ通信



多方面から子育てをサポート

子育ての悩みを社会全体でサポートする取り組みが活発になっていきます。今回は、さまざまな立場から子育てを支援するグループの活動を紹介します。



▲ 吉川洋子さん、金志明さん、金さんのお子さん

自宅を開放して、子育て支援。 母親の居場所づくりと異世代との交流

ノンナのリビング

自宅が母子の交流の場 自身の経験が教材に

近所の若い子育て世代の親子を、自宅に誘ったことをきっかけに、転勤などで近くに知り合いが少くない母親の居場所を作ろうと、吉川洋子さんと長男のお嫁さんの金志明さん（きんしやうみん）の親子が平成23年秋に安佐北区で始めたサロンが「ノンナのリビング」です。

イタリア語で、祖母を意味する言葉「ノンナ」。もともとは、高校の教師を務めていた吉川さんが、定年退職後、近所に暮らす若い子育て世代の母親と話をすることで、横のつながりがなく気軽にでかける場所がないことを知ったことが始まりです。

「私は、自分の子育てを通して、悩みつつも子どもの内なる力を信じていると、覚悟と希望を持つことが大切であると感じました。子どもたちが自分に与えられた人生を精一杯に生きる喜びを感じられるようお母さんたちにも休む場所を提供し、応援したいと思いました。専業主婦の方が多く、ふだんはなかなか人と接する機会が少ないので不安を抱えながら生活し



▲ ノンナのリビング

ている人が多かったのだと思います。最初は、相談に訪れた母親の育児に関する悩みを気取らず出しやばらず、自宅でお茶を飲みながら気軽に話を聞くことから始まりました。やがて、1組、2組と口コミで紹介された母親が相談に訪れるようになり、私たちノンナ世代との交流や各方面で活躍中の方のワークショップなどを取り入れながらお母さんの世界だけではない出会いと研鑽の場も提供しています」とノンナのリビングをまとめる吉川さんは語ります。

子育てをする上での大切な要素

サロンは、毎月第2、第4金曜日の2回、午前10時から午後3時頃まで開かれます。3ヵ月から3歳までの子どもとその母親合わせて10人近くが、吉川さんの自宅に少しずつ集まって、時にはノンナ世代と



▲ サロンでの食事会の様子

の交流、子どもは庭で遊び、母親は昼食を一緒に食べながら吉川さん子育ての悩みを相談したり、情報交換しています。気取らず、飾らず、まるで本当の母親や祖母に育児について話をしているようなアットホームな雰囲気、このサロンに通ってくる一番の理由になっているそうです。

「子育てをしていく中で、一番大切なのは夫婦関係だと思っています。また、見ず知らずの場所で不安を抱えながら生活する中で、近くに相談できる相手が居れば、その不安も和らぎます。同世代だけではなく異世代の繋がりがもたらす作って行けば、もっと子

育ての世界も風通し良くなって行くのではないのでしょうか。サロンも最初は、母子だけでしたが、今ではサロンを開く日以外にも、旦那さんも交えた、家族ぐるみの交流会も時折行っています」。

幸いにも、吉川さんの長男夫妻が子育て世代という事もあって、サロンを訪れる母子との交流も深まっています。長男夫妻は、吉川さんの自宅近くで二トやひきこもりの若者を支援するNPO法人「ブエンカミーノ」を運営。サロンとも連携して、利用者が耕した畑で栽培したジャガイモやサツマイモなどの農作物を使った収穫祭などのイベントを春と秋に開いて、世代を超えた交流を深めています。

子育てを軸に世代を超えた地域交流へ

「私を含め、子育てをしている母親は誰かに話を聞いて欲しい。相談したいと考え悩んでいます。子育てを経験した人からいろんな視点の経験談を聞くだけでも安心します」。



▲ ブエンカミーノの収穫祭の様子

その積み重ねによって、信頼できる人間関係も生まれてくるのではないのでしょうか」と金志明さんは語ります。今後、吉川さんは、サロンで農業体験イベントやワークショップなどを企画している他、屋外でもくつろげる場所づくりを目指して、近くの遊休地を交流広場に整備することも計画。ベンチや日よけの屋根をつけて、パーベキューを開いたり子どもと遊んでもらえるようにして、母子以外にも地域の人たちにも利用してもらおうことでの世代間交流も図れると考えています。長男夫妻と共に、子育て世代が抱えている心の葛藤を話してもらおう、多世代で交流しひと息できる癒しの場所作りを、吉川さんは目指しています。

Vol.37 花八手号 2013.11 らしく 自分らしく、 粋なくらし contents

ページ

1 **特集**
多方面から子育てをサポート

..... ノンナのリビング

..... ゆうやけルーム高陽

..... Club I am a Father

5 **Hmi助成支援団体の紹介**

..... 可部地区社会福祉協議会
ボランティアバンク
「りんりん可部」

..... 藤の木学区まちづくり推進協議会

..... 輝く命のプロジェクト

7 **人材バンク 名人 達人 宝人**

..... 宮田 晃さん

..... 元村 操さん

9 **ようこそ! 公民館へ**

..... 西区内公民館

10 **らしくレポート**

..... 手押しポンプの不思議

らしくコラム

..... 学生による子育て支援
鈴峯女子短期大学保育学科
専門領域 保育学 幼児教育
教授 光本 弥生

11 **情報の森**

15 **プラザ通信**



表紙写真/ノンナのリビングで交流する親子

情報交換の場、環境が整うことで、親子の絆もより深く…。 未来に向けて芽生え始めた、パパ友交流サークル

Club I am a Father
http://papalife.jp/papacircle.html



▲ 代表の北佳弘さん

きつかけは情報不足と環境整備の遅れ

4年前に、自身の子どもを育てる時に、看護師として働く奥さんを応援する上で自らが主夫となった北佳弘さん。その際に、周囲にパパが育児に参加する際の情報が不足していたり、パパ同士がふれ合う場所などの環境が整っていない事に気がつきました。そこで、自らがパパの育児情報の交換や育児への意識向上、現役パパ同士の繋がりを作り子育てを楽しみたいと考え、PaPalife研究所としてサークル「Club I am a Father」の運営を始めました。

「まずは平成23年、パパ同士の繋がりを作り情報交換をする目的で、子育て日誌を中心に記したホームページを立ち上げました。その後、パパの子育て支援の全国組織のNPO法人に入会し、中国支部を作りしました。全国組織の中国支部を立ち上げたことにより講演依頼も増え、同時にブログの読者も増え始めました。子育ての楽し



▲ 逃走中ごっこの様子

み方を知った私は、子育ての情報を一方的に発信するだけでは物足りなくなり、パパ同士が交流する場を作りたくと考えて、同年、サークル組織「Club I am a Father」を作りました。

私自身、育児を始めた頃は公共施設のオープンスペースを利用していましたが、そこはどちらかと言えばママが中心に利用する場所であって、多くのママが居る中にパパが入っていくには勇気が必要なことでした。

私も、最初は利用しづらく感じていましたが、ボランティアの方の協力もあって、オープンスペースを利用するママに子育てに関する疑問を相談したりしました。その経験もあり主夫として成長することができました。そこで、もっとパパ同士が育児について情報交換する場所が増えれば、男性の育児に対する意識も向上して、子育ても楽しむことができるのでは、と思いまし

パパ友ならではふれ合い

活動を始めた頃は、私ひとりでしたが、ホームページ上で「Club I am a Father」への入会を募ったところ、時間が経つにつれて会員数も増え、2年が経った今では1歳から10歳までの様々な年代の子どもの持つ20人のパパが参加してくれています。

活動は主にホームページ上でパパ友同士が育児に関する情報交換をするのももちろん、不定期でパパと子どもが参加するランチ会や、キャラクター弁当と一緒に作る教室を開いたり、さらには公園で「逃走中ごっこ」と題した大規模な鬼ごっこをして、親子が一緒に遊ぶ機会を作るなどパパならではのふれあい方で子どもたちと一緒に時間を過ごしています。

「サークルを作つて、パパ同士が育児に関する情報交換をしたり、イベントにも親子で積極的に参加してくれる光景を見ると、育児に対して積極的に考えてくれるパパが増え始めているように感じています。外で元気に走り回る子どもの姿を見て、パパも喜び一緒になつて騒いでいます。その楽しそうなパパの姿に、子どもも喜んでいます。しかしまだ会員数が足りないのです。できる事が限られています。ホームページ上か



▲ パパと子どものランチ会の様子

世代を超えた交流 高齢者による「孫」世代の子育て支援

ゆうやけルーム高陽



▲ ゆうやけルーム高陽の皆さん

昭和49年から平成2年にかけて分譲され、当時、中国・四国・九州地方で最大規模の団地となった広島市安佐北区の高陽ニュータウンに、団地内に暮らす高齢者たちが交代で放課後の子どもを預かる施設として作ったのが「ゆうやけルーム高陽」です。

高陽ニュータウンは、ピーク時には約2万2千人が暮らしていました。しかし今では、約1万7千人近くまで減り、そのうち65歳以上が約3割近くを占め高齢化も問題になっていきます。その中で生まれた子育て支援による世代を超えた交

地域活性化策の中から生まれた子ども支援

世代を超えた交流が生む地域の躍動

高陽ニュータウンの中心部の、タウンセンタービルの地下1階にある市民会議の事務所を開放して作られた「ゆうやけルーム高陽」は、毎月3つの重要課題を考え、取り組んでいくことになりました。高陽ニュータウンは郊外にあるため、保護者が職場から帰宅する時間が遅くなる、一人親家庭が多い、放課後に子どもの居場所が無く問題行動を起こしやすい、などの観点から、子ども支援が一番の重要課題なのではないだろうかと思われました。まずは保護者が迎えに来るまでの時間、スタッフが常駐する場所で、子どもたちに安心して宿題や読書をして過ごしてもらおうための場所を提供することにしました」と高陽ニュータウンまちづくり市民会議代表の吉村栄夫さんは語ります。

流。年々人口が減り、高齢化が進む高陽ニュータウンの住民の、地域に対する意識を今まで以上に高めてもらい活性化することを、平成24年の夏に広島県住宅供給公社、町内会、社会福祉協議会などによって結成された住民組織が「高陽ニュータウンまちづくり市民会議」です。

「毎月のミーティングの中で、子ども支援、高齢者支援、地域支援の3つが重要課題と考え、取り組んでいくことになりました。高陽ニュータウンは郊外にあるため、保護者が職場から帰宅する時間が遅くなる、一人親家庭が多い、放課後に子どもの居場所が無く問題行動を起こしやすい、などの観点から、子ども支援が一番の重要課題なのではないだろうかと思われました。まずは保護者が迎えに来るまでの時間、スタッフが常駐する場所で、子どもたちに安心して宿題や読書をして過ごしてもらおうための場所を提供することにしました」と高陽ニュータウンまちづくり市民会議代表の吉村栄夫さんは語ります。



▲ 子どもたちの活動の様子

交流の広がりに向けて

「ゆうやけルーム高陽を始めて、高齢者たちも子どもたちとふれ合うことを毎日楽しみにしている、と言った声を数多く聞くようになり

さらにこの「ゆうやけルーム高陽」がある場所は、日中は地元の高齢者たちが木工や竹細工、手芸や洋裁などの趣味を楽しむ場所として利用していることから、将来的には高齢者と子どもたちが一緒に楽しく楽しめる教室も計画しているそうです。



▲ 地域でのボランティア活動の様子

ました。平日は時間が限られているので難しいですが、今後は夏休みや冬休みなど子どもたちが長期の休みに入る時には、高齢者が取り組んでいる趣味を楽しむ場に子どもたちも一緒に加わって楽しむことで、世代を超えた交流を図ってもらえればと考えています。それが、暮らしやすい街づくり、地域の活性化にも繋がると思います」と、吉村さんは今後について語ってくれました。

多世代に渡る交流によって生まれる、新たな子育て支援。若い世代の子育てにおいて、頼りになる人が近くにいるだけで安心して暮らすことができる、そのような街づくりがこれから期待されているのかもしれない。